



第16回

海の中の「聞き耳頭巾」?

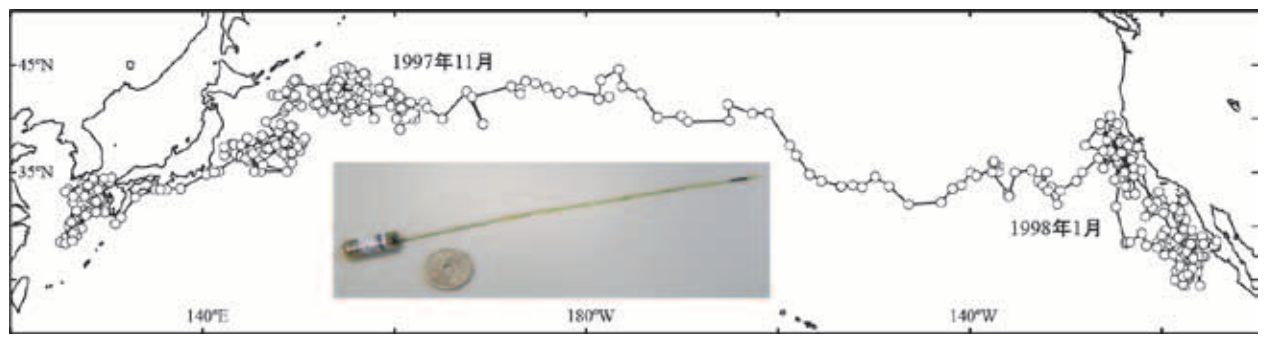
上閉伊郡の昔話に「聞き耳頭巾」という話があります。

お爺さんが、木の実を取ってやった子ギツネに招かれ住処に行く、病気の母ギツネがいた。母ギツネは子のお礼にとお爺さんに頭巾を渡した。被ると生き物の声が聞こえる頭巾だった。ある日、頭巾を被るとカラスの会話が出来た。長者の娘の病気がクスノキのたたりによるものだという。お爺さんは長者を訪ね、クスノキの声を聞いてみたところ、クスノキがたたっているのは自分の腰の上に新しい葺を建てたからだを知る。すぐさま葺を動かすと、クスノキはとたんに葉を茂らせ、

娘も元気になった。お爺さんは、長者の褒美でギツネの親子に油揚げをいっぱい買ってしまった、という話。

海の中の魚の動きを調べるとき、聞き耳頭巾とまではいきませんが、それに近いものを使います。小型記録計です。水深や水温はもちろんのこと、最近は加速度や心電図を計測できるものもあります。筆者がクロマグロの回遊や行動の調査で使う記録計は、最新のものは、水中重量で1・2グラム。一端にケーブルが繋がっています。ケーブルの先端は水温と照度のセンサになっており、本体に温度・圧力センサと時計が内蔵されています。本体を魚の腹の中に装着することが多く、その場合、本体の温度センサは体温を計測することになります。

この記録計の特徴のひとつは、照度から経度・緯度、つまり魚の位置を推定できることです。「GPS(衛星利用測位システム)を使えばよいのでは」と思われる向きも多いかと思うのですが、実は電波は海中では通じないため、海水中を泳ぐ魚の居場所を探るのには使えないのです。推定の方法ですが、簡単にいうと照度のデータから日出・日没の時刻割り出して求めます。大槌町の毎日の日出・日没の時刻が分かるのは、経緯度が分かっているからで、この逆の原理で求めるわけです。この記録計から得られたクロマグロの回遊状況の一例をお示します。



アーカイバル・タグとタグデータから推定されたある個体の移動状況



北川 貴士 (東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター准教授)

1972年滋賀県生まれ。専門は魚類行動生態学。専門の研究を分かりやすく伝えることがモットー。著書に「マグロはおもしろい—美味の秘密、生き物の謎」(講談社文庫)がある。

シナ海で越冬したあと翌年5月に九州南端から四国・本州沿岸を移動し、5月に房総沖に到達しました。三陸沖、北海道沖で滞留のち11月に東へ移動を開始し、たった2カ月で太平洋を渡りきり、1998年8月にカリフォルニア沿岸で再捕されました。88センチメートルに成長していました。

子供のころ、『まんが日本昔ばなし』というテレビ番組で「聞き耳頭巾」を知ったときは、不思議な頭巾があったものだ。大人になっても、この話は、人は昔から動物の意思を知りたいという好奇心のあらわれと想っておりました。しかし、小稿を書きながらあらためて思ったのですが、この話の主題はもしかすると、不思議な頭巾にあるのではなく、頭巾を使ってギツネも娘もクスノキも幸せにしたお爺さんの行いにあるのではないかと。

頭巾はある、あとは…。深読みしすぎて自分で自分のハードルを上げ過ぎたかもしれません。